The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	未来共生における経験の意味
Author(s)	尾﨑, 俊也
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 441-443
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

未来共生における経験の意味

尾﨑 俊也
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

この原稿が活字になるころには、未来共生一期生は四年次を終え最終年である五年目を迎えているだろう。未来共生の現場に出ていく諸活動は、一年次、二年次に集中していた。四年次のいま、イベントや研修、授業のほとんどを修了し、未来共生と関わることも以前より少なくなった。この過程でそれぞれ一期生の進路は分岐していった。博士後期課程へ進学せず、いまや民間企業や官庁に勤めている一期生も少なくない。残ったメンバーで集まることも以前に比べ大きく減った。

私はいま、博士論文を書くための調査と研究に取り組んでいる。社会現象を男性性の視点で読み解く、男性学の研究である。男性としての社会的経験を踏まえた男性研究者の立場から、親密な関係において日々起こっているDVや性暴力などと社会的に構築された男性性の関係を研究している。一年次、二年次は、時間としても精神的にも未来共生が、私の大学院生活の半分以上を占めていた。当時は、未来共生の諸活動の只中に身を置いていても、研究のために本が読みたいと思うことも往々にしてあった。周囲からも「未来共生は研究の時間を奪うプログラム」と思われていた節があったし、それもあながち間違ってはいなかった。だから、いまこのエッセイを書いている私はその「忙しい時期」を抜けたのだがどこか少し寂しさを感じる。ただ、あのときに戻りたいとは決して思わない。振り返れば大儀なことも煩悶することも多かった。

いまになって思えば、この四年間のなかで経験したことは、もう二度とありえないことだ。一期生全員が集うことはもう二度とないかもしれない。それだけ貴重な時間であったが、当時そんな感情はなかった。ただただ、一生懸命に足掻いたりもがいたりしていた。プログラム開始当初、先生方からは履修生を含めて主体的にこのプログラムをつくっていこうという趣旨のことを再三言われた。これからどのようにプログラムが進んで行くか分からない状況のなかで、一年次から大阪西淀川公害の歴史をめぐるフィールドワーク、被災地東北でのフィールドワーク、ロンドンでの語学研修、NPO・公共団体での公共サービス・ラーニング、海外短期研修（ハワイ、ザンビア、インドネシア）と目白押しだった。この間、私たちは素直に主張を表明し論争することを躊躇わなかった。ときには、さまざまなテーマをめぐって激しく対立した。日本社会では、相互作用の戦略として、清濁合わせ呑んで押し黙ったり、一方で意に沿わないことでもひどく共感を示したりする技術を身体化する社会過程を「大人になる」と表現するが、一年目はそれとはかけ離れたものだった。

かつてはよしとされてきた、男は仕事、女は家事という性別役割分業は個人の「価値」観なのか、ジェンダーに基づく差別なのか。被差別部落地域をあるいは東北の被災地を専門家でもないわれわれがフィールドワークすることの倫理や社会的意味。東北の被災地沿岸部で防潮堤を再建設するか否か。私たちは自らが研究対象とする差別的現象だけではなく広範な位相に及ぶ差別を問題にしたが、みなが等しくあらゆる差別に十分に注意を向けたかと言われたら、間違いなく否だった。

いくつかのリーディング大学院のプログラムは先端的な医療や機械、環境などの技術を用いて、経済界や先進国に先導された国際社会にコミットし、さまざまな社会変革をもたらそうとしている。これに対して未来共生プログラムはおもに、社会のなかで周縁化・従属化された社会の諸相をとりあげ、なぜこのような差別や抑圧が起こっているのか問うてきた。これらの両側面が相互連関しながら、より生きやすい社会を実現することがリーディング大学院の目的であったと思う。

私は、社会のあり方に疑問を投げかけ、たとえわずかでも人々の意識の変化を変えたい。そう思ってきたし、いまも変わらない。ただ、社会の巨大な構造を前にして、世の中を変えようなんて腰が抜けてしまう。かつて日本は高度成長を謳歌したが、われわれの世代に残されたのは、1000兆円を超える膨大な借金と使い古されてそのままになった規範と制度だけだ。その古い時代の差別にまみれた規範や制度をなんとか変えていきたい。そのために大学という象牙の塔に籠るのではなく、さまざまな生活世界を生きる人々の経験を現場で感じながら、「差別とは何か」ということを学んできた。

この経験は、研究と実践のなかで生かされている。未来共生で学んだのは、社会的な波及効果をもたらすという視点がなければ、研究は研究のための研究に終わるということである。私は男性の女性に対する暴力を社会的に啓発するホワイトリボンキャンペーン・ジャパンの活動に参加している。人々が生きる意味世界に問いかけなければ社会は変わらないという視点からである。この活動は、未来共生で行ってきたことと大きく関連している。三年目の海外インターンシップで訪れたカナダ・トロントで行われているDV加害者や、広く男性に問いかける暴力防止と更生のための社会的啓発活動のあり方は、そのまま日本での実践の参考になっている。総じて、実践に入っていく方法を育む場であった未来共生のフィールドワークは、大きな経験知として身体化されている。これから私が行おうとしていることは、なにか別のものではなく未来共生の延長線上にあるものとして位置づけられるだろう。